

# 《2970対0》とは、いくらなんでも

田畑光永（会員）

3月3日の政治協商会議の全体会議開会から始まって、20日の全国人民代表大会（全人代）の閉会まで、18日間という例年より長丁場となった中国の春の政治シーズンが終わった。

昨秋の共産党大会では、「習近平一強体制」が強化されたことは間違いない。が、同時に盟友の王岐山が「68歳以上は引退」という不文律に従って要職に就かなかつたから、さすがの習近平も引退時期だけは守って総書記2期目が終わる2022年以降まで居座るつもりはないのだろうか、と思わせた。

ところが、今度の全人代の直前、にわかに憲法改正という話になった。それも国家主席の任期をなくしてしまうという、どう見ても習近平1人のための、正面突破作戦であった。

しかもその理由がふるって

る。党総書記、（党・国家の）

中央軍事委員会主席、国家主席の3つのポストは「三位一体」（こんなキリスト教の言葉を使っている）であり、このうち国家主席だけに任期があるのは不合理だ、というのである。党の総書記や軍事委主席といった1人だけのポストに任期がないのがおかしいのに、国家主席までそれに合わせるというのは話が逆である。

ともかく、今回の憲法改正で習近平が「冗談でなく、終身、トップを続けようと考えていることがはっきりした。昨秋の党大会以来もやもやしていた霧だけが晴れた。

ところがそれに追い打ちがきた。それがこの小文のタイトルである。

3月17日、全人代全体会議で行われた国家主席選挙の投票結

果である。この選挙の候補者は

習近平1人、いわば信任投票だから、圧倒的な得票には驚かないが、それにしても反対も棄権もゼロというのには驚かされる。同時に副主席選挙も行われ、こちらの候補者は昨秋で引退したはずの王岐山であった。だまし討ちみたいだが、その王岐山に對しては反対票が1票だけ投じられた。

このことは何を意味するか。政策の是非でなく、役職者を選ぶ無記名投票で3000に近い票に反対が1票もないというのはまるで奇跡としか思えない。これにはタネがあるはずだ。

じつは昨秋の共産党大会に習近平はなぜか貴州省で大会代表の資格を得たのだが、その時も満票で代表に当選した。そして今度の全人代ではなぜか内蒙古自治区で代表の資格を得たが、

その時も反対ゼロであった。つまり習近平には1票たりとも反対票は投じられないことになったようなのである。

中国のこういう選挙は候補者名が書かれた投票用紙に賛否を記入して投票するのだが、これらの例ではっきりしたのは、それがどういふ投票したかを、集計する側は全部分かる仕組みになっていて、しかも、投票するほうもその仕組みを知っていて、反対票は入れられなかったということだ。そうでなければ、こんな奇跡は続けて起きない。王岐山に反対票を入れたのは王岐山自身ではないかと私は推測している。談合の上、わざと習近平と1票差をつけるために。

それにして選挙とは賛否の比率を明らかにするためのものがある。そして多数の側は少数意見を尊重することが前提である。しかし反対票0の選挙とは、反対者を押しつぶすためのものとしか言いようがない。こういう政治では、なにか恐ろしいことが起こる予感がする。